

スズメガイダマシ類

「生きている化石」として知られる腕足動物は古生代（およそ5億4200万～2億5100万年前）に大繁栄した海の生き物で、体を覆う貝殻を持っていることから腕足貝と呼ばれることもあります。二枚貝のような外見をしていますが、触手が並んだ触手冠という特殊な器官があるなど、二枚貝や巻貝の仲間（軟体動物）とはずいぶん異なった体の構造をしています。瀬戸内や九州で食用にされることのあるシャミセンガイも腕足動物ですが、富山ではなじみの薄い生き物ですね。



古生代の代表的な腕足類スピリファー（左上）
と現生のシャミセンガイ（右下）



スズメガイダマシ類の1種
スゲガサチヨウテン（岡山県）

富山でもっともよく見つかる腕足動物はスズメガイダマシ類です。ズメガイダマシ類はカサガイに似た低い円錐状の殻を持ち、海底の礫に付着して生活しています。しかし、詳しい生態が分かっていない謎の多い生き物です。「よく見つかる」とは書きましたが、1953年に富山湾から報告されて半世紀以上、日本海沿岸での生息については分からないままでした。ところがここ5年ほどの間に、日本海沿岸の各地からスズメガイダマシ類が相次いで報告されるようになりました。また、砂浜を探すと、打ち上げられた殻がたくさん見つかります。富山から生きた状態ではまだ見つかっていませんが、砂浜に殻が打ち上がるので、近くの海底にすんでいると思われます。

スズメガイダマシ類は太平洋沿岸や瀬戸内海では生息環境の悪化により姿を見ることが少なくなったとされています。しかし、富山の海ではむしろ増えているようにさえ感じられます。砂浜近くに波消しブロックがたくさん設置されているので、このような人工的な環境にすみついているのかもしれませんが。

貝殻などの漂着物が多くなるこれからの季節、砂浜に出かけると宝探しのようで楽しくなります。小さな貝殻を拾い集めていると、スズメガイダマシ類に出会えるかもしれませんよ。

（吉岡 翼）



富山の砂浜に打ち上がっていたスズメガイダマシ類の殻

5 mm